

# 福島県二本松市錦町で保存されている巨大石

## 提起

### 古代のオリオン信仰の巨大「三つ石」ではないか！

#### 1 初めに

福島県二本松市錦町の不思議な巨石について考えた。

恐縮であるが私は「巨石！東北の巨石番付」というブログを開いている。その中で“横綱”として福島県安達郡白沢村の岩角寺の巨石群を格付けした。

本来単体としての巨石を格付けしているのだが岩角寺の巨石だけは巨石群として例外扱いをした。

その岩角巨石群に隣接する二本松市錦町吉祥寺を中心に不思議な巨石が点在している。

番付ブログに於いては、一部巨石を既に「番付十両、吉祥寺・立石巨石」として掲載していた。

今夏「岩角山の巨石群」に魅せられ4度目の確認に向いた際、吉祥寺にも立ち寄ったが道を間違えた為、偶然にもマウンドに鎮座する巨石が

目に入った。今まで一部分しか見えてなかったので、丸い何処にでもある路傍の巨石と軽く見流していたものである。今般そのマウンドをゆっくり廻り込んで確認した。

今まで何を見ていたのか！と齒軋りする気持ちと後悔であった。

同時に“何故こんな所に巨石が3つ並んで置いてあるのだ！”と、不思議な巨石へのめり込んだのである。

更に既に格付した「立石と烏帽子石の両巨石」をよく調べるとこれまた三つ石の跡ではないかと思われた。

今般、あらためて確認した結果を、厚かましくも且つ無謀にも私見を入れてその不思議の答えを考察してみた。

尚、今般これを纏めるにあたり、今から八十三年前の大正15年に調査確認された石も参考にされて、十四

年前の平成7年に地元に於ける町興しの一環としての石の表示等の結果を併せ小誌に纏め発刊された“真言宗立石山吉祥寺様”による「錦町の

銘石と石造文化財」（以下資料と言う。）を参考にさせて頂いた。

抜粋掲載した箇所も多数あるのでお断りして置きたい。

が、この構成考察は私自身の責任に帰するもので、資料の著者、関係者の方々には一切責任はない事を付記させて頂き度。

ただ、一方で、この考察については資料本の発刊「資料監修者鈴木光様」

のご一読を頂いた事も付記させて頂く。勿論、ご了解を得たという事でなく目を通して頂いたという事に過ぎなく私自身の勝手な考察である事をご理解賜りたい。

資料監修者の鈴木光様は現在90歳を越え元気でられるが、多少は耳が遠くなられたもののお尋ねした巨石や寺院名等に対してのご教示は

淀みなく、その記憶力は抜群で感嘆致した次第であり、又二度に亘りご意見など伺い大いに参考にさせて頂いたものである。

## 2 真言宗立石山吉祥寺 周辺の銘石

二本松錦町は二本松三春線から少し入り込んだ所にある。岩角山の北西七百m程に位置する道路沿いにある。左の写真は吉祥寺の下から撮ったのだが、手前の二つの石が立石と烏帽子石である。  
後方のこんもりしたマウンドが三つ



石の裏側にあたる。

昭和59年ここ吉祥寺境内から棒状石製品が出土した。

全長、0.85m、径、0.27m  
で当遺跡最大の出土品という事である。この他、土器、石皿、土偶、石  
鏃石具類や無数の土器片が出土した



とある。

縄文中期・紀元前二千五百年前のものと判明しており、県の考古学会より、太古より崇拜された霊岩地帯と認められている。

二本松市史第九巻によると、「・・・西新井地区の字立石に立石明神の石塔群がある。花崗岩の露出した自然岩塊の小山で大小四十数個の群からなり、太古から崇拜されたと見られる霊岩で周辺に石塔群があり・・・」

「・・・立石岩明神の近くにある真言宗寺院吉祥寺に・・・養蚕神の神像が安置されている。立石山吉祥寺が立石岩明神の別当寺である・・・」とある。蛇足だが根を下ろした神仏習合思想は明治新政府の神仏分離で混乱をきたした様である。

また、資料には、「立石一帯は縄文中期の遺跡でもあり・・・正徳寺創建、中世の葉の木山館の存在、鎮守慈眼明神の勧請等々、立石地帯は霊岩塊を中心とした、この地方の信仰と文化発祥地であった事が考えられ

ます」とあり、「後代の人たちも先人たちの意思を継承し、厚い敬神崇祖の念から折々に様々な石塔を立てているのは種々の施設を施し、地区民の心の古里として現在の景観が築きあげられたものと思います。」と結んでいる。

主だった銘石をそれぞれに伝えられる伝説を付記し紹介する。

資料は「・・・いにしへの信仰は森羅万象全てのものに霊が宿るとされ、先人達は巨岩や特異の岩石に石そのものの持つ自然性と重量感から特に畏敬を感じ信仰の対象とし、あるいは神仏の名を穿つなどして信仰してきたものと考えられます・・・」と記している。



『御神楽石』

吉祥寺を道路側から見上げると巨大な獅子頭が天を仰いでいるように見える所から付けられたという。



『荷鞍石』

御神楽石の東面に樺の大木を背負うように張りついている所から付けられたものという。



『舟石』

御神楽石の南面に半ば埋没しているが、船の軸先の形をしている所から付けられたという。



『亀石』

これもまた埋没しているが、参道を山裾から横切るように横たわっている亀甲状の石の形からこのが付けられたという。



『鶴石』

同様、亀石から10mの距離にあり鶴  
亀一对の意味を持たせて付けられた  
ものと思われる。



『道陸神』

吉祥寺から二百mほど離れた旧町内  
との分岐点に古くから祀られている  
という。  
どの地方でも、花嫁が通れない道、  
通ってはならない道、などの俗信も  
持ち、祭神にも諸説あり特異な神様  
という。



『耳垂れ石』

道陸神の後方にあり、耳の病に効験  
があると伝えられ、戦前までその名  
残があったという。  
道陸神と関連して神格化して付けら  
れたものかという。



『血吹石』

道陸神と同じ場所にあ  
る。  
嫁に行った先で耐えら  
れなく実家に戻る途中  
この蔭で悩み・・・以  
来闇に消えた。  
長い年月の後堰工事の  
為岩を割ったが割れず  
代わりに血がにじみ出  
たという。



『達磨石』

径約0.8 mのやや球状の自然石で  
表面に人面が彫られていて人知れず  
草むらに埋もれていたという。

3 提案（考察）：三つ石巨  
石はオリオン信仰か！

3・1「立石と烏帽子石」の三つ  
石



似た巨石などは存在しないのだ。

二つとも大地から突き出たかと思わ  
れるようである。

右が烏帽子石で勿論形状からその名  
がついている。

左が立石で約5 mの高さがある。こ  
の旧地区の地名の発祥と言われてい  
る。

資料では、「：二つが独立し並立し  
ている姿は神秘感と自然の造形美」  
と賞賛している。

しかし、この両石がほんとうにここ  
に地球誕生以来此処に存在したのだ  
ろうか！

私にはあたかもどこからか運ばれて  
そこに配置された如くに感ずるので  
ある。

よくよく確認した所、立石、烏帽子  
石の直ぐ脇に少し出っ張った石が確  
認できた。

私が左手で指し示している所である。

鈴木光氏にお尋ねしたが、案の定、  
大分昔は三つ立っていたという。そ



うなのだ、「三つ石」だったのである。  
所謂オリオン信仰から来たものでは  
ないのだろうか！と思うのである。

立石と烏帽子石の二つには流石に手  
を付けず、奥の三つ目の石を砕き利  
用したと推定される。

三つ石のその学術的な価値も考慮さ  
れずこうして一つは消えて行ったの  
である。

只その後、石仏等の保存及び研究が

吉祥寺の五十mほどの所に「立石と  
烏帽子石」がある。  
不思議な光景である。周りにこれと

村で話しあわれ、実行されて今日に至っているという事である。  
この吉祥寺の目の前の山の名は！



この山の麓に、前述した達磨石だけでなく不動滝の脇に不動尊が祀られている。  
この不動尊の一つ置いた隣の山が羽山である。羽山信仰もあったか？と思われる。  
人は死ねば霊となり三年は家の周り

にいて家を守り、三年過ぎると羽山



に行き、三十三年過ぎると霊界に上がるという信仰である。部落を見下ろす所が羽山なのである。  
更に庚申信仰も盛んに信仰された様である。

縄文のいにしえから住んでいたこの地域、信仰対象は変わってもその信仰心は失われるものではない筈だ。信仰の対象は自然の巨石や巨木そして星座の信仰なども、初めはオリオン信仰だったかも知れない。縄文に

住んでいたなら更に古い時代から住んでいたと推定しても無理は無  
いと思う。

羽山の下には不動滝といわれる川もあり縄文人いや古代人が住まない訳は無い。この様にオリオン信仰から来たに違いないと思うのであるがどうであろうか！

当然三つ石は運ばれて此処に置かれたものではないだろうか！

**3・2 「鳥石山」三つ石**  
次に、マウンドの様なこんもりした山、これが今回の主眼なのであるが山の名は「鳥石山」という。山と言う程のものではない。

マウンドの右端にあり、突き出た様な石で鳥が口を開けた様に見える所から「鳥石」と付けられたという。





それにしても三つの右端の烏石がこの山の名前とは面白い。特長を捉えたからだろう！  
真ん中の石は庚申岩、左端はその形が楕円であり中央部が割れている所から「大満好石（おまんこ石）」転じて「女石」更に転じて現在は「弁天岩」という。



頂点に弁才天の石塔が立てられておりその名の起原といわれている。この斜面に「奉庚申供養磨崖仏」があり、上部に日体、月体、下部に三猿と講中拾 人の文字が線彫りされていたというが現在は判読できない。  
この地区には確認されているだけで、石塔三十七基、石像七基、磨崖五基が確認されているという。

この烏石山の三つの石の形状について、鈴木光さんが語るには九十年間全く変わらず、親にも聞いた事があるがこれまた昔から変わっていない、という事であった。その様な百年や二百年の年月の単位ではないのではないか。  
古代から変わらずあったかもしれない。

右端の烏石は真ん中の庚申岩から割れたように見えるが、若しかしたら割って3つにしたのかもしれない。

このマウンド＝烏石山が道路を隔てた山と続きであったのかという事が疑問であったが、昔からこのままで、山とは続きではなかったという事であった。  
とすれば山から転がってきた訳でもない。

この三つ石はここに初めからあったという事になる。  
ましてや周囲の地にこうした三つ石の様な巨石が存在してないのである。

とすれば立石と烏帽子石と同様運ば

れて配置されたのかもしれない。この巨石を運ぶなんて先ず常識では考えられない事である。現実に全く不可能なのである。

でもこのマウンドに立った三つ石を遠くから眺めて頂きたい。

不思議な感覚に陥る事である。

この巨大な石を運んで配置した訳でもない筈なのに、全体像を見ると、どうしても人為的な臭い？がするのである。

こういったものについては、どうしても明快な答えが出ない。勿論文献などに書いてある筈もない。  
初めから人為的な移動などありえない。



い事として頭から否定されてしまう。当然の事である。しかし、考えられるのは只一つ、「現代の能力では不可能だが人間が運んだとしか考えられない」と思われる事なのである。こういった事はオーパーツの類で世界中に存在するのではないだろうか。



何処から見てもマウンドにそっと置かれたように見えるではないか！



誰が何の為に、どうやって！の答えが出ない。古代人の英知によるものか！等と言うと笑われる！だが、私はオリオン信仰から来たに相違無いと思うのだ。その為に700m離れた岩角山麓に転がっていた石を運んだのだ！（これは強引過ぎるか？）  
こうしたものは、我々の常識的な考えは及ぶものではないのではないかと！いつも考えてしまう。

唯一考えられる事は、マウンド上の三つ石も初めは一体になっている巨岩だったが、元々出っ張った形をしていた上の石が長年の風雨で削られた

て二つの石となって姿を表し、そして又一つが二つに裂け、そしてこの三つ石だけが徐々に現在の形になっていった。  
初め一体であった周囲の巨岩も全体として削られ二つの石を押し上げる格好でいつの間にか草木の土で覆い隠されてしまった、と。  
自然は時として我々の計り知れない魔法を見せてくれるので、ないとは言えないが余りにも出来すぎで信ずる訳にはいかない。

蛇足ながら、因みに東北の三つ石を見てみよう。



#### 4 結言

上記の通り、岩手盛岡市三つ石、福島二本松市三つ石、山形天童市三つ石に勝るとも劣らない雄姿ではないか！ 巨大さにおいては比類が強い。強引と思われるのは百も承知であるが、私自身、オリオン信仰から来た三つ石と考えるしかないのだから。  
勿論「立石・烏帽子石」も嘗ては三つ石だった事も含めてである。



この地域に二つの巨大な三つ石が存在したのだ。

いつか答えが出る日が来るかもしれない。

うれしい事に、この地区の方々の方々の巨石に対する考え方は資料にも載っている。

「錦町の銘石と石造文化財」の巻頭「ごあいさつ」の中で、「・・・銘石は天与の宝物であると共に地区の誇りでもあります。又石造文化財は祖先たちが残してくれた掛け替えのない貴重な遺産であります。長く地区民の「心のふるさと」として、今後ともその伝承と維持保存及び顕彰にさらなる尽力を切望する次第であります。・・・」と。

更に、「石造文化財については「：：野仏には祖先達の純真で一途な信仰心と汗と血と涙がにじみ込んでおり、単に信仰の遺物として看過する事は出来ないと思います。又野仏は百万金を積んでも絶対再生できない貴重な文化財

であり、野仏を大切に保存維持する事は現代に生きる私達子孫の責務であり、その事は取りもなおさず祖先の供養につながる事と思われまます。」書き記されている。

勿論野仏と巨石の相違はあるが、巨石にまつわるその謂われ、伝説を書き記しておく事は同様の見方であると信じている。

貴重な文化遺産と言うべきその巨石（イワクラ）が、開発のもと破壊されてきた事はいたる所に見受けられるが、この地域にあつては石の価値を認識され積極的に維持保全されている所に感動し敬意を表するものがある。

以つて、他所に於いてもこうした地域の巨石（イワクラ）の保全の静かなる機運が盛り上がる事を切望するものである。

## 追記

この「提案書」を鈴木光様にお届

けしたのであるが、鈴木様が更に、自分が嘗て石や寺や文化財やらについて色々教えた後輩に読み回したとの事。

それをご覧になられた後輩、即ちご近所に住む71才になられる渡辺伝司様であるが、渡辺さんから思いもかけずお電話を頂いた。

「何の関わりもない遠くの方が、此処錦町の巨石について調べられ、烏石山の三つの巨大な石について一つの仮説を立てられた事に敬意を表すと共に、地元この巨石群に光を当ててくれた事に感謝する。」というものであった。

答で、地元で橋を架ける工事の時、この巨石を取り壊し碎石として利用する話が出たそうである。

地元では昔からのこの地にある馴染んだ巨石を壊す事に反対したそう、今此処にこうしてある事に感慨を覚える、という事でもあった。

私は鈴木様や地元の方々からお叱りを受けたり、又、ご迷惑な事があつては申し訳ない気持ちでいたのであるが、逆に励まされ、しかも考えれ

ば私の仮説がありうる事かもしれない！などと勇気付けられるお言葉も頂戴したのである。

深い探求もなく濃密さも持たない単なる薄っぺらなこの提案書に、過大な御礼と評価を頂いた事に恥かしさもあるが、地元の方に喜んで頂ける事は私の望外の喜びであると思つている。

近くに來られた際にはぜひお立ち寄り頂きたい！又、知る限り石にまつわる伝説等をご伝授したい！とのお言葉には感謝の言葉も出ない。

了